安田女子大学紀要　49，283-290（1-8）　2021.

宮本　輝「真夏の犬」論

藤村　猛

安田女子大学　文学部　日本文学科

要旨

「真夏の犬」は、語り手「ぼく」の一夏の異常な体験談である。父親から与えられたバイト（見張り）中の酷暑の苦しみや、押し寄せる野良犬たちとの闘い、そして、自殺した女性の死体などが語られる。「ぼく」は、生きることと死ぬこと、そして、父親たちとの関係を考える。それは成長のためのつらい「通過儀礼」かもしれない。

キーワード

真夏のバイト、野良犬との闘い、女性の自殺体、死と生

一　はじめに

「真夏の犬」（『新潮』一九八八年5月号）は、語り手の「ぼく」（中学二年生）の一夏の異常な体験談である。作品を全四章の起承転結構成とすれば、量的に短めの一章と四章は物語の導入・結末であり、主要な出来事は二・三章で起こる。

時は昭和三十七年八月、舞台は大阪の千鳥橋の近くの廃車置き場である。「ぼく」は父に言われて、「朝の七時から夜の七時まで、その廃車置き場に坐って」、「タイヤや、まだ使える部品を盗まれないように見張」（544）[1]るバイトをする。「ぼく」は真夏の暑さに苦しみながらも、廃車置き場にやって来る野良犬たちとパチンコで戦い、一日を過ごす。

が、八月下旬のある日、「ぼく」はパチンコによって負傷し、野良犬たちに迫られ、しかも、トラックの荷台に若い女性の変死体を発見し、恐怖の時間を過ごす。

安藤始氏の言うように、「真夏の犬」という題名は、野良犬たちだけではなく、「主人公の在り方と心情を象徴して」[2]いるし、文庫

本の解説者・饗庭孝男氏が「生活をけなげに支えようとする少年の『内面』と野犬とのたたかいは、さながら容赦ない現実との対応を意味しよう」[3]と言うように、「ぼく」と野良犬との戦いは「容赦ない現実との対応」である。そして、その後の女性の死体との遭遇も、「ぼく」にとっては衝撃的なものである。

それらは「大人の世界の謎めいた記号」[3]（饗庭氏）としても、「ぼく」に死（と生）の存在を突きつける。「ぼく」は、人間関係の闇や死を考えざるを得ない。

昭和三十七年の世相を背景にして、「ぼく」を襲う出来事（野良犬の襲来や女の自殺体など）に対する、「ぼく」の言動や内面を作品に即して見ていき、作品の特徴や良さを考える。

二　父の大金と「ぼく」のバイト―一章―

作品は、「それまで、雀荘に入りびたっているか、もしくは一週間も二週間も行方をくらまして、家に帰ってこなかった父が、突然、大金を持って帰って来」（543）る場面から始まる。父は大阪中古車部品組合のために、「空いている土地を借り」、「そこに各々が仕入れてきた廃車を置」くことを思いつき、千鳥橋近辺の「千五百坪の空地」（544）を借り、組合から金を出させることに成功したと言う。

父の持って帰った大金に、母は大喜びをする。それまで、母は父の放蕩や事業の失敗に苦しみ、「借金取りに追われるという生活に疲れ果て、長く定収入のないことで憔悴していた」。「ぼく」も大金と母の喜びを見て、「歓びのあまり、アパートの部屋の隅で、でんぐり返り」（544）した程であった。

その大金に関連して、父が「ぼく」に与えた仕事（バイト）は、朝の七時から夜の七時まで、廃車置き場の監視をすることであった。[4]バイトの代償として、父は「ぼく」にトランジスタラジオを買ってくれた。（当時、トランジスタラジオは高価な物であった。）

八月十五日の朝、「ぼく」は、家の近くの福島西通りから市電に乗り、廃車置き場のある千鳥橋に向かった。ナップ・ザックの中には、「麦茶と、母が作ってくれた弁当」やトランジスタラジオが入っていた。千鳥橋の電停で市電から降り、「父が書いてくれた地図を頼りに、海とは反対側への道を歩いて行」き、「メタンガスのあぶくが湧くドブ川に架かった橋」に着くと、そこは「小規模な工場が密集する地帯」（544）だった。「ぼく」は橋を渡って、ドブ川に沿って歩いて行ったが、「行けども行けども人間の姿は映らなかった」[5]（545）。

やがて〈山川物産〉とペンキで書かれた倉庫の壁が見えた。倉庫は三軒並んでいて、その手前の広い空地には、すでにきのう運ばれて来た廃車が四、五十台置かれてあった。（中略）ぼくは、廃車の並ぶ空地の真ん中で立ち停まり、日陰を捜した。一台の、とりわけ大きなダンプカーは、廃車ではあったが、ほとんど原形のままで、空地に敷かれた穴ぼこだらけのコンクリートに菱形の影を落としていた。ぼくは、そのダンプカーの周りを居場所に定め、麦茶の入っている水筒と弁当箱を出し、ナップ・ザックを敷いて、そこに腰を降ろした。（545）

二

こうして、空き地にあった大きな「ダンプカーの周り」が、「ぼく」の居場所となり、「ぼく」のバイトが始まる。

三　野良犬との戦い―二章―

しばらくして、「ぼく」は、真夏の暑さと「あたりに人の気配が微塵も感じられな」いことに苦しむ。ラジオをつけても、「そこから聞こえてくる声や音楽に心を傾けなかった」のも、「退屈を通り越して、ある種の恐怖を抱いた」せいである。

動きを停めたかのような時間と、うだるような暑さと、必ず近くにいるはずの人間の気配が遮断された場所に何もせず坐りつづけていることは、たった二時間のあいだに、麦茶の入った水筒を空にさせた。（546）

「ぼく」は、市電の停留所近くの食堂に小走りで行き、かき氷を食べ、麦茶を何杯も飲み、無断で空の水筒に店の麦茶を入れた。その後、廃車置き場に戻ったが、「時計の針は、やっと十時をさしていた」にすぎない。

ようやく昼になると、太陽が真上に来て、「ぼく」はダンプカーの下に潜り込み、弁当を食べ始めた。

そうしているうちに、この相当な年代物のダンプカーは、シャフトやスプリングのことごとくが腐っているのではあるまいかと考え始め、いまにもシャシーが折れて、下にいるぼくをぐしゃぐしゃにつぶしてしまいそうな気がしてきたのだった。（546）

そんな不安をかき消したのは、弁当の匂いに誘われて集まってきた六匹の野良犬たちだった。

犬たちは、長く垂らした舌の上に泡を載せ、低い唸り声を立てて、ダンプカーの周りを取り囲み、ときおり威嚇するかのように、背中の毛を逆立てた。（546）

狂犬病の犬と思った「ぼく」は、あわてて逃げ出す。家に帰り、そのことを父に言うと、「あほんだら！　それでもお前は男か。」と叱られる。「ぼく」が半泣きになって訴えると、父は「俺が見た野良犬の中に、狂犬病にかかってるのは一匹もおらへんかった」（547）と言い、外出する。麻雀屋かと「ぼく」は思ったが、父は一時間もたたないうちに帰ってきて、「金具もゴムも頑丈で、相当な威力がありそう」なパチンコを「ぼく」に渡し、次のように言った。

「近くから撃ったら、人間でも殺せるほどのパチンコや。それで撃ったれ。動物っちゅうのは、自分より強いやつとはケンカをしよれへん」（548）

父の言葉もあり、翌日、「ぼく」はパチンコを持っていき、廃車置き場に向かう途中で「パチンコの弾にする小石を何十個もひろい」、野良犬たちの襲来に備えた。

廃車置き場の「異常な静寂は、きのうよりもさらに強まったが、いつ、あの野良犬たちが襲ってくるかという恐怖のお陰で、時間のたつのは速まった。」（548）

野良犬たちがやって来たのは、昼近くだった。「ぼく」が先頭の犬めがけてパチンコを撃つと、犬の目に当たり、犬は濁った悲鳴をあげてのたうちまわり、他の犬ともども逃げていった。「ぼく」は、「見たか！　人間を舐めるな」と、「映画のヒーローを真似て、高笑

い」（549）をする。「ぼくは、急に浮かれた気分になり」、石蹴りをして遊び、飽きるとダンプカーの運転席に入り、そこが掃除されていてきれいなのに気付く。夜にやってくる大学生の仕業だと思ったが、車内の猛烈な暑さに耐えられず外に出る。

その後、日陰になっているダンプカーの下で、用心しながら弁当を食べ、午後三時になり、「緊張を解いて、あおむけに寝そべった。」そうしていると、車の底から「黄緑色の澄んだ油が、いまにもしたたり落ちそうな形で滲み出てい」るのに気付く。それは「油のエキスだけに化した美しい抽出液みたい」なのだが、車の底のあちこちから滲みだしているのを見ていると、「だんだん膿に見えて」（550）[6]くる。

そのうち、「ぼく」に「きのうと同じ恐怖が甦」る。「ダンプカーの車体が崩れ落ちる音が、心の中で聞こえ」、「息を詰め、ダンプカーの下から這い出」る。「ぼく」は、バイトの最終日までの日々を考え、「むしょうに腹がたったり、情けなくなったりした」が、「母の幸福を考えることで、自分を元気づけ」（551）る。

きっと、この仕事は、いつまでも、ぼくたち一家に月々決まった収入をもたらし、母に久方ぶりの平安と幸福を与えつづけることだろう。（551）

「ぼく」は、母のためにがんばろうと思う。（ここから「ぼく」の母への愛情と、裏腹にある父への不満が分かる。）その気持ちは、「ぼく」をダンプカーの荷台の上で跳びはねさせたり、逃げ去った野良犬たちに、「おい、いつでも来いよ。目ェは可哀そうやから、耳を撃ったる。」と言わせる余裕となる。夕方になり、「ぼく」は「何か大仕事を為し遂げた気分で家路につ」（551）く。

四

「ぼく」が千鳥橋の電停で市電を待っていると、労務者たちに交じって、「水色のワンピースを着た」「長い髪にきついパーマをあてた」、「若い娘らしくない青い横顔と、うなだれたうしろ姿」の「二十二、三歳の女」（552）がいた。その後、「ぼく」は何度かその女に出会う。四度目の出会いは、廃車置き場の近くの川沿いであり、「橋の手前で振り返ると、女も振り返ってぼくを見ていた。」（552）「ぼく」は、彼女を「美人でもなければ無器量でもない、だが妙に、人を振り返らせるものを持」（554）っていると思う。それは後に明らかにされるが、若さや性的魅力というよりも、彼女の「ものうげで優しそうなもの」（559）であった。

この女が、後日、ダンプカーの荷台で服毒自殺をするのだが、このとき女が振り返ったのは、単に「ぼく」とこの辺りでよく会うだけではなくて、廃車置き場にいる中学生だと知っていた。もしくは、密会する相手（父）の息子だという認識があったからかもしれない。

四　再度の野良犬との戦いと女の死体―三章―

休みもあと五日となった日、小さな台風の影響で雨が降った。「きょうは、ダンプカーの運転席で寝ていればいい」（552）と、「ぼく」ははしゃいでいた。その日のバイトは、雨によって時間がたつのが速いし、「まったく人間の気配がないという恐ろしさからも解き放たれ」（553）ていた。

昼過ぎに、運転席で弁当を食べ始めると、野良犬たちがやって来た。「ぼく」は余裕を持って、ボス格の茶色の犬めがけて小石を撃った。ところが、パチンコの弾が当たると、いつもなら全速力で逃げるのに、今日は逃げなかった。（実は、「ぼく」のパチンコのゴムを引く力が弱く、犬に与える打撃が弱かったのである。）「ぼく」は「次第に血の気が失せ、怯えて、うろたえ」てくる。しかし、夜にやって来る大学生の存在を思い出し、「少し落ち着きを取り戻」（553）し、窓ガラスを閉めると、運転席に「まぎれもない化粧の匂いが立ち昇っ」てくる。うしろの仮眠室を覗くと、「化粧の匂いは強くな」り、「タオルケットの上に、置き忘れられた父の扇子」（554）を発見する。「ぼく」は父と女との密会を想像する。（父は、家に「五日も帰って」きていない。）

そこに、自動車部品屋の男たちがやってくる。「ぼく」は、彼らに自分のバイトのことを説明し、「野良犬たちとの攻防戦」を話して聞かせる。男たちは笑い、一人の男がパチンコで犬を撃った。弾が当たった犬は「いったん跳ね起き、それから、五、六歩走って、ぬかるみに倒れ、しばらくもがいたあと、体を痙攣させながら逃げて行った。」（554）男は、「ゴムを引く力や。五十センチぐらい伸ばして撃ったら、どてっ腹に穴があくで」とアドバイスしてくれた。

男たちが去ったあと、「ぼく」は「どこへ行くあてもないまま、市電の停留所まで歩」いたが、すぐに家に帰ろうとは思わなかった。「幸福になっている母」と会いたくなかったのである。その理由は、父の浮気である。市電に乗って、「ぼく」は「汚ならしい、汚ならしい」（555）と胸のうちでつぶやき続けていたが、そのうちに、父の浮気の決定的証拠がないことに気付き、「にわかに元気にな」（556）る。この変化は父への信頼からではなく、母の悲しみが生じないことへの願望によろう。

その晩、父は九時ごろに帰り、「しきりに母に冗談を言ったり、ぼくの労をねぎら」ってくれた。かつ、「父がちゃんと扇子を持っていたので、ぼくは、はしゃいで、父と腕相撲をした。」（これは想像にすぎないが、父は女と廃車置き場か、その近くで密会して、ダンプカーの仮眠室に忘れていた扇子を持って帰ったのだろう。女は翌朝に、ダンプカーの荷台で服毒自殺をする。）

翌日、廃車置き場に着いた「ぼく」は愕然とする。ダンプカーの下に水溜まりができていたのである。午前中は車の影にいたが、午後からは太陽が真上に来て、「ぼく」は行き場がなくなった。そして、野良犬たちがやってきた。

「ぼく」は昨日教えられたように、「パチンコを持つ手を伸ばし、力一杯ゴムを引いた。引いたと同時に、ぼくは右目に烈しい衝撃を受けて倒れ」（557）る。パチンコのゴムが切れたのである。

ぼくが気を失っていた時間は、おそらく一分か二分程度であったろう。（中略）ぼくは右目をおさえて立ちあがり、何が起こったのかと考えた。パチンコのゴムが切れたことに気づくと、ぼくの喉からかすれ声が洩れた。ぼくは、ダンプカーの荷台によじのぼり、瞼から流れる血を手の甲でぬぐった。十数匹に増えた犬たちは、いっこうにパチンコの弾を撃ってこないぼくを見ていたが、そのうち、一匹、一匹と近づいて来た。ぼくは、自分の瞼が、どのくらい切れたのかわからないまま、ハンカチ

を当て、荷台の上から犬たちと向かい合った。（557）

そして、「ぼくは、荷台の隅で、くの字に体を曲げて横たわっている女の足を踏」む。

ぼくはその横にしゃがみ込み、わけのわからない、悲鳴とも絶叫ともつかない声をあげつづけた。ぼくはダンプカーの屋根にのぼり、そこで四つん這いになって、女を見つめた。犬たちの何匹かが、荷台によじのぼろうとして、タイヤや車体のあちこちに爪を立てた。（557）

まさに恐怖の体験である。痛む瞼から血を流し、唯一の武器であるパチンコを失ったため、野良犬たちへの抵抗の術はなく、しかも、足下には女の死体がころがっている。

女は、ぼくの見た、あの女だった。女の爪の何枚かは剥がれ、そこから噴き出た血は乾いて黒くなっていた。水色のワンピースの胸の部分が破れ、乳房の周りにも黒い血がこびりついていた。（557）

「ぼく」は発作的に、「ポケットの中から、パチンコの弾に使う小石をつかみ出し、女の体に投げた。」「ぼく」はパニックに陥っていた。その後、荷台の後部に空になったウィスキーと、母の常用する睡眠薬「プロバリン」[7]の瓶を見つける。「ぼく」は、ウィスキー・プロバリンを媒介として、母と父、そして、死んだ女と連想しただろう。その結果、昨日の扇子のこともあり、女の死に父が関係していると思ったのではないか。

「ぼく」は「助けてェ、助けてェ」（558）と大声で助けを求めるが、誰もやってこなかった。「ダンプカーの屋根は、熱したフライパンと化し」、「ぼくは、立ったり坐ったり四つん這いになったりして、ひたすら助けを求める声をあげつづけ」る。そのうち、「強い眩暈に襲われ、何度も屋根から落ちそうにな」り、「意を決して」、ダンプカーの荷台に降り、「後部の隅に膝をかかえて坐」（558）る。

「ぼく」は、襲い来る野良犬への恐怖に耐えるとともに、荷台に横たわっている死体とともにいなければならないのである。女の死体には、蝿が群がり始めていた。

蝿は、女の頬や額を這い、すぐに飛びあがって、羽音をたて、次に、ふくらはぎや足の裏に停まった。（558）

蝿は、女の内股を這っていた。蝿の数は見る間に増えていった。ぼくの右の瞼は腫れ上がり、右目はほとんど見えなかった。女の長い髪が白く見えたり赤く見えたりした。（558）

「喉の乾きと瞼の痛みが、ぼくに、ここで死ぬのではないかと思わせ始め」る。日常ではあり得ない「死」との直面である。しかし、「死体の傍にいることに慣れていった」「ぼく」は、好奇心から、「死体も陽に灼けるのだろうか」と、「こわごわ顔を近づけ」（559）る。

もし、何度も目にした水色のワンピースを女が着ていなかったら、ぼくは、別の女だと思い込んだかもしれない。唇を固く閉じ、同じように固くつむった目は、何だか懸命に痛みをこらえているようで、生きていたときに垣間見せた、ものうげで優しそうなものは、ひとかけらもなかったからだ。（559）

かつて「ぼく」が彼女を振り返ったのは、彼女の持つ「ものうげで優しそうなもの」に惹きつけられたためだろう。死体の彼女は、

「何だか懸命に痛みをこらえているようで」あった。事実、（警察の見解によれば）、彼女は「苦しみのあまり荷台のへりを掻きむしっ」（560）て爪が剥がれたのであり、胸の傷も同様であった。彼女の苦しみが、死体を通して「ぼく」に迫る。それは、野良犬への恐怖と重なり、死を感じることであり、ひいては生への執着にも通じる。「ぼく」は、パニックの中で、死を、そして、生を思わざるを得ない。

「ぼく」がそんな状況から救われたのは、きのうの男たちがやって来た午後二時ころであった。

五　事件の後―四章―

「ぼく」は警察に連れて行かれ、応急処置を受け事情を聞かれた。一時間後、母が「駈け込んで来」る。その後、ともに病院へ行き「ぼく」は点滴を受け、また警察に戻った。父は別室で尋問をうけていた。

検視の結果、女が死んだのが朝の六時ころで、「暴行された形跡はな」かった。女の死に事件性がなかったからか、十一時すぎには三人とも解放される。警察署を出て三人は無言で、家路についた。アパートの部屋に帰り着くなり、父はあぐらをかき、「暑いなァ」とだけ言ったあと、荒々しい足取りで出て行った。

ぼくは、あの若い女と父とが、いかなる関係であったのかも詳しくは知らず、女がなぜ自殺したのかも知らない。知りたかったが、ぼくはそれを口にしてはいけないと思っていた。そして、事件が原因だったのかどうかも不明だが、空地の所有者は契約を解除し、父は仕事を失い、半年近く消息を絶ったのである。（560）

今までの父の放蕩ぶりから考えて、父と若い女に関係があったとしても不思議はない。しかし、「ぼく」と母はそのことに触れない。それが「ぼく」と母の暗黙のルールだった。それもあってか、父は半年間失踪して「ぼく」たちは父から捨てられ、その間、母子二人で生きていくことを強いられる。そして、それは、「ぼく」にとって、母との生活を守ることであり、父や父との関係を考えることでもある。

その後、「ぼく」は母に甘えて、「しばしば母の膝に顔を埋め、痛い痛いと訴え」る。すると、母は「目の玉に当たらんで、ほんまによかったなァ。」と言い、「あからさまに、ぼくとの頬ずりを求め」る。それに対して、「ぼくはそのたびに身をかわし、母の頬から冷たく逃げ」（560）る。

「ぼく」は母との暮らしに順応しているが、幼児のような「頬ずり」には「冷たく逃げ」る。以前であれば、応えたかもしれないが、野良犬との戦いや女の自殺体との遭遇などを体験して、「ぼく」も少しは成長した。母に甘えはするものの、頬ずりには「冷たく逃げた」あたりに、子どもからの脱皮が窺われる。

この作品は、「ぼく」の中学二年生の夏の異常な体験―真夏の苛酷なバイトや野良犬との戦い、そして、女の自殺体との遭遇など―が語られ、「ぼく」は泣き叫びながらも耐え、乗り越えたのである。その後、父は失踪し、母との貧しいが穏やかな生活が始まる。[8]

「真夏の犬」は、「ぼく」の異常なバイト体験をリアルに語りつつ、「ぼく」の成長をも描いた作品である。そして、この作品は読者に非日常的場面に遭遇させ、「ぼく」とともに、生や死、および、人間関係の複雑さを考えさせる。これらが、この作品の特徴であり、良さである。

注

1. 本文の引用は、『宮本輝全集』13（新潮社　1993・4）による。（　）内の数字は、全集のページ数である。
2. 安藤始『宿命と永遠―宮本輝の物語―』（おうふう　2003・10）による。
3. 引用は新潮文庫『真夏の犬』（1993・4）による。
4. 朝の七時から夜の七時というと、十二時間のバイトである。現在であれば、中学校二年生には無理であろうが、当時では、あっただろうと思われる。ちなみに、夜間は、父の知り合いの息子（大学生）が監視して、九月からは守衛を雇う予定とのことであった。
5. いくら場末の工場地帯とはいえ、人影が一つもないのは不自然である。おそらく、これは、宮本の以前の作品「こうもり」で描かれた鶴町の描写と同様、主人公の他に人がいないという状況設定にして、主人公の孤立感や閉塞感を印象づけようとするためではないか。（主人公の感性は鋭く、やや病的であるのは事実としても。）
6. 犬の片目がつぶれた描写といい、ダンプカーの底の油の描写といい、不気味な描写である。極めつきは、後に出てくる若い女の死体の描写である。
7. このプロバリンは、宮本の以前の作品「眉墨」で、母が自殺の際、飲んだものである。母親の場合は、早めに発見され、病院で処置を受け、命は助かる。
当時、プロバリンは睡眠剤として、簡単に手に入り、自殺に用いた人も多かった。
8. やがて父が帰ってきて、また、試練の日々が来るのも「ぼく」は承知していよう。宮本輝の父を描いた小説は少なくなく、父の困った状況（事業の失敗や浮気・家出など）という設定が多いが、子供にとって、父の存在は小さくない。この作品では愛情よりも、不満の方が大きいが、父を完全に嫌っているのではない。

〔二〇二〇・九・一七　受理〕

コントリビューター：島田　大助　教授（日本文学科）